



若者の力で 途上国に教育革命を起こす！ — e・Educationの活動を通して —

世界と出会った原体験

14歳の夏、私は1ヶ月間にわたりブラジル、アルゼンチンへサッカー留学をしていました。幼稚園の頃から時間があれば友達とボールを蹴り、いつか海外で活躍することを夢見ていた少年にとって、ブラジルに行つてサッカーができたことは、人生において最も幸せを感じた瞬間でした。

これが最初の海外経験でしたが、サッカー以外にも多くのことを学びました。特に、「自分が日本で過ごしている生活」というものが、世界では当たり前のものではないということを知り、大きな衝撃を受けた1ヶ月となりました。スラム街で見た人々の表情や、ボロボロの服を着て裸足で走り回る子どもたちの光景は、未だに頭に焼き付いています。ブラジルでは、自分と同年の少年が、自分の家族を養うためにサッカー

— をしていました。日本では感じたことのない、本当の意味でのハングリー精神を目の当たりにしました。

「世界には多くの問題があり、それでもその中で一生懸命生きている人々がいる。それに比べて、自分は何も知らずに、恵まれた環境でなんてぬくぬくと生きているのだろう」と感じ、今までの自分の生き方が恥ずかしくなりました。

14歳での初めての海外留学が原体験となり、「英語を話せるようになって、もっともつと世界のことを知りたい。いつかは世界の問題を解決できるような仕事をしたいたい」という想いを持ったのがこのときでした。

企業で働きながら、ネパール支援のNGO活動開始

その後、英語に対するモチベーションはどんどん強くなり、大学ではアメリカへ留学しました。世界中から来る留学生とともに



吉川 雄介

NPO 法人 e-Education 海外事業統括

【よしかわ・ゆうすけ】1985年生まれ。早稲田大学国際教養学部、米国Portland State Universityにて社会学を専攻。NPO 法人 e-Education 海外事業統括。NPO 法人 Colorbath 代表理事。途上国の教育支援に加えて、日本におけるグローバル教育にも従事。世界経済フォーラム（ダボス会議）Global Shapers メンバー。

に学ぶことで、自分自身の視野が広がりました。特に、生き方、働き方、学び方の多様性に出会うことができ、固定観念に縛られずに生きていく大切さを学びました。

大学卒業後には新卒で、進研ゼミで知られる教育企業のベネッセへ入社しましたが、アメリカ留学での経験があったことで、仕事と並行してネパール支援のNGO活動を同時に始めました。土日や平日の夜の時間を活用して調べものをしたり、社外の様々な方とミーティングを行っていました。1つの会社に属してその仕事だけをやる必要はないと思っていましたし、限られた時間でマルチタスクを行うことで、嫌でも生産性を高める働き方を考えるようになりました。ちなみにベネッセでの素晴らしい仕事の経験が、その後の途上国支援活動に大いに生きたことは言うまでもありません。毎年長期休暇を利用してネパールへ行き、ストリートチルドレンのための支援を行つ

仮設の教室で肩を寄せ合い勉強するネパールの子どもたち



たり、自分にできることを必死に探し、もがきながらも活動を行っていました。活動すればするほど課題は深刻で、貧困問題が抱える壁の高さに、何度も心が折れそうになりました。でも、ネパールではいつも子どもたちの笑顔がとてもキラキラと輝いていて、「次はいつ来てくれるの？」と人懐っこく慕ってくれることがとても嬉しくて、支援をしているこちらのほうが多くのパワーを子どもたちからもらっていました。

ただ、数年間活動を行う中で、「この活動を続けていても、問題は1つも解決されないんじゃないか」という虚無感にも襲わ

れました。仕事をしながらのある意味片手間での支援活動は、できることにどうしても限界がありました。中途半端な形でこのまま続けていくことに難しさを感じ、「退路を断つて一歩踏み込むからこそ、できることがあるんじゃないか」と思うようになり、ベネッセを退職して途上国の教育支援を本格的に行っていく決断をしました。

e・Educationとの 出会い

退職する旨を会社に伝えたちょうどその日に、以前から知り合いだったe・Educationの三輪開人代表から連絡をもらいました。わざわざ東京から大阪へ会いに来ていただき、途上国の教育支援をぜひ一緒にやりましょう、と熱いメッセージをもらいました。

e・Educationの活動は以前から本やメディアを通して知っていましたし、外から応援するという立場でした。まさか自分がその中で仕事をするとは思っていませんでしたが、本当に人生はどこでどうなるかわかりません。ただ、「一歩ずつ歩んできた点があとになって線になってつながる」ということを改めて実感しました。ここから、e・Educationの海外事業統括としてアジア6カ国をフィールドとしながら途上国の教育支援の仕事をするようになりました。

e・Educationの活動

e・Educationは、「最高の授業を世界の果てまで届けよう」というミッションのもと、すべての若者が可能性に挑戦できる世界を作ることを目指し活動を行っています。都市部と農村部の格差や経済的な問題から、学びたくても学べない子どもたちが世界にはたくさんいます。生まれた環境が違うだけで、未来を諦めなければならぬ状況が今なお存在しています。テクノロジーや映像授業を最大限活用して、途上国のすべての若者に希望の光をともしていくべく活動を行っています。

具体的には現在、バングラデシュ、フィリピン、インドネシア、ミャンマー、ラオス、ネパールのアジア6カ国でプロジェクトを展開しています。それぞれの国において最も教え方が上手な「最高の先生」を探し出して、その先生の授業を映像授業として撮影、編集をして、農村部の果てまでも届けていきます。

農村部では、小学校しか卒業していないボランティアの先生が指導にあたっているケースも少なくありません。生徒だけではなく、先生も映像授業を通して教え方を学ぶことができます。もちろん、映像授業があればすべての問題が解決されるわけではなく、教育において教師の存在は最も大切です。映像授業をツールとして、いかに先

支援方針についてネパールの先生方とディスカッション



生の指導を支え底上げしていくかがポイントです。

途上国における教育の格差

地理的、及び経済的な理由から来る格差は途上国において非常に深刻です。農村部では、教師の絶対数が不足しており、1クラス80名において教師は1名という状況もあります。加えて、指導の資格や経験を持たないボランティアの教師が対応しているケースも多く、十分に勉強ができる環境ではありません。

例えばネパールでは、高校生が全国共通で受験する高校卒業認定試験の合格率が、

都市部と農村部の学校では大きく異なります。都市部では、約90%の生徒が合格し次の進路に進むことができるのに対して、農村部では合格率が30%ほどと多くの生徒が不合格となり、その後の就職が難しくなるという状況が続いています。

優秀な教師は農村部の学校での勤務を好まないため、格差は広がる一方です。最高の授業を映像にして届けることができれば、生徒はいつでも、どこでも、何度でも繰り返し勉強することができます。

日々、課題を乗り越えていく

行ってきた教育支援の活動は、すべてが順風満帆に進むものではなく、あらゆることを調べて考えて、準備をした上で取り組んでいる、現地では日々課題に向き合いながらの活動です。想定通りにいかないことばかりです。学校や先生のためには思っただけ懸命行っている活動自体が現地でなかなか理解してもらえないということもあります。

自分たちの活動は本当に必要とされているのか、根本的な課題を解決できるのか、という問いが度々目の前に立ちはだかります。その度にかなり気持ちとしてはへこむのですが、「挑戦しているからこそぶつかる壁なんだ」と考えるようにしています。

世界には、無数の課題があり、今なお解決されずにいます。すぐに解決できないからこそ今も課題になっているのであって、

短期間の取り組みでもそもそも解決できるものではないと思っています。特に教育においては、時間もかかりやすくし成果が目に見えるものでもありません。根気強く、未来を信じられるかどうかが大切なんだと思っています。途上国で活動する際に重要なのが現地パートナーですが、この想いを共感してともに取り組める仲間と出会えたことが何よりの財産です。

課題に挑み続ける1つ1つの経験が、きつといつか線になって課題解決につながる日が来ると信じて、日々取り組んでいます。

やりがいを感じる瞬間

私が途上国の教育支援を行うようになって約8年がたちますが、やりがいを感じる瞬間は大きく2つあります。

1つは、生徒や先生が学習に対して、純粋かつまっすぐ一生懸命に取り組んでいる様子が見えるときです。彼らはもつと学びたいと強く思っていますし、学べることもがとても楽しく、幸せなことだと捉えています。「教育」が持っている価値や可能性を強く実感することができ、意義深い仕事をしているといった感じさせてくれます。

私はこれまで日本において教育の仕事に関わってきましたが、そのような実感を得る機会は、残念ながらそう多くはありませんでした。生徒にとって学習は、「苦手で



映像授業で学習するネパール農村部の子どもたち

嫌なもの」「無理やりさせられるもの」といった捉えた方をしているケースもありました。先生方においては、「いかに学習モチベーションを高めるか」が大きな課題であり、生徒の学習行動を喚起する難しさも私も感じていました。

途上国の教育現場を訪れると、目を輝かせて学ぼうとしている生徒がいます。また、教育によって子どもたちの未来が大きく変わると信じている教師や親がいます。教育の機会を作り提供する仕事の尊さを感じさせてくれますし、それが私が頑張る原動力になっています。

もう1つは、現地政府等と連携したより大きな取り組みにつながっていく瞬間です。活動の立ち上げ期においては、現場に入り込み調査や議論を重ね、いわゆる草の根の活動をじっくりと行います。日々の課題を1つずつ乗り越え、現地の先生方と少しずつ関係性を構築して成果を積み重ねていきます。この活動を焦らず迷わずじっくりと行うことが大切だと感じています。その理由は、そういった草の根レベルでの継続的な活動があつてこそ、発見や成果を得ることができ、その後現地の教育省等の政府からの信頼を得ることができるようからです。想いだけではなく、継続的な行動や経験がなければ、人を動かすことはできません。長い取り組みを続けた先に、「ぜひ一緒にプロジェクトを実行していこう」「Educationの取り組みを全国的に

展開しよう」そういった声を政府機関や企業の方から頂く瞬間は、本当に報われる気持ちになります。「取り組んできたことは間違っていないかった。自信を持ってさらに活動を上げていこう」と、活動のスピードがさらに上がっていきます。決められたことをこなすのではなく、ゼロからイチを作る活動だと思えますし、社会に価値を生み出していく活動でありたいと思っています。

活動を通じて感じたこと、
学んだこと、伝えたいこと

途上国の教育支援を行ってきて、途上国の課題解決に取り組もうと思っている方々にぜひお伝えしたいことが3つあります。これらは、壁にぶつかつたり悩んだときに、私自身もよく振り返る言葉でもあります。

1つ目は、「時間をかけてでも課題解決に取り組み続ける覚悟はあるか」です。短時間で解決できる課題はほとんどありません。それにも関わらず、私たちはつい変化や成果を短期的に求めがちです。短い期間で成果を実感しにくいなら、もっと長い時間をかけてじっくりと取り組むことが大切だと思います。1つの課題に対して、じっくりと長い時間かけてでも解決に向けて取り組める覚悟があるかどうか、問われているのはそういう部分なのではないかと思っています。成果を出すことに対する焦りは、ときに現場で起きていることを見えにくくしてしまっています。じっくりと現場を観察し、やり取

りをして、積み上げていくことが大切です。

2つ目は、「1人で解決するのではなく、みんなで解決する」ということです。教育支援に限らず社会の課題を解決する際、自分たちだけでできることにはどう考えても限界があります。他の団体や多くの人を巻き込み協働していくスタンスが大切だと思います。そのためにも、「自分たちはどんな価値を發揮できるのか」ということを明確にして、それを研ぎ澄ましていく活動が必要だと思います。価値が明確な団体同士であれば、協働の形も見えやすくなると思います。

最後に3つ目は、「一歩踏み出さないとわからないことがある」ということです。インターネット上で様々なことを瞬時に調べ



ネパールプロジェクト実施校の先生方と

ることができませんし、多くの人々からアドバイスをもらうことも大切だと思います。一方で、それらを最大限参考にしながらも、現地ですぐに一步踏み出してみたいとわからないことがたくさんあると思っています。

大切なのは「行動」だと思います。行動することで学び得た情報をもとに修正し、次の行動に移していく、そういったPDCAサイクルを繰り返していくことが大切です。

これからやりたいビジョン

途上国の教育支援を仕事にできていることはすごく幸せなことですし、少しでも課題解決に貢献していきたいと思っています。それと同時に、これから取り組んでいきたいと思っていることは、社会課題の解決に向けてアクションを起こす人を増やす、ということだと思います。1人でできるアクションよりも、100人でできるアクションのほうが多くの課題を解決できると思います。国際協力を本業にするのは多少勇気がいることなのかもしれませんが、迷っている人の背中を押せるような存在になりたいと思っています。

私は、息子が生まれた翌月にベネッセを退職し、国際協力の仕事を本業にしました。会社を辞めてしまって生活は大丈夫なのかとかなり心配もされましたが、不安視されたほど大変ではありませんし、むしろ充実した日々を送ることができていると胸を張

って言えます（もちろん家族の支えがあったからこそです）。家族には心から感謝しています。挑戦には不安も伴うと思いますが、仲間の存在によって前に進むことができると思います。

これからの変化の激しい社会では特に、働き方やキャリアの積み上げ方も多様化していくと思っています。やりたいことを仕事にできる可能性も同時に高まっていると思います。想いはあるけれど不安で一步踏み出せない、という人も多くいるのではないかと思います。私自身、挑戦とアクションを続けていくことで、1人でも多くの人が行動を起こすきっかけになれることができたら、こんなに嬉しいことはありません。

その先に見据えるもの、日本の地域の課題

現在私は、途上国の教育支援に従事していますが、その先に見据えていることは日本の地方・地域が持つ課題です。日本は高齢化や人口減少などから課題先進国と言われており、特に地方部での課題は深刻だと思っています。途上国における格差の課題解決等に取り組んだ経験を、日本の課題解決に活かしていきたいと思っています。

地方においても充実した環境で教育を受けるためには何が必要なのか、仕事がない地域にいかに関心を創出するかといったことは、日本も途上国も共通した課題です。グローバルにもローカルにも価値を發揮できるよ

うに、日々精進していきたいと思っています。

終わりになりますが、ブラジルで訪れたスラム街の原体験が、途上国の教育支援、その先の日本の地方部が抱える課題解決の仕事へとつながっていくことなんて、全く想像もしていませんでした。行動をし続けてきた結果、多くの方々との出会いによって今の自分が形成されています。やりたいことが明確ではない人もいると思います。が、一步踏み出して行動を続けることで、きつと点と点が線につながり、少しずつ明確になっていくと思います。

ボランティアや途上国支援に関心がある方は、ぜひ一步踏み出して行動に起こしてみたいと思いますし、手を取り合って課題解決に向けて取り組んでいければと思っています。



ネパールでの映像授業の制作チーム